ニュースを問う

ハーグ条約への加盟

真の被害者は子ども

ハーグ条約の加盟を求めてデモ行進する日本人や外国人の親たち＝6月20日、東京・渋谷で

久保田麻里衣（岐阜支社報道部）

国際結婚の破綻などで子どもの親が、もう片方の親に無断で子どもを国境を越えて連れ去った場合に、子どもをそれまで生活していた元の国へ戻す手続きを定めたハーグ条約。日本はこの条約を批准しておらず、国際結婚の増加とともにトラブルが増えている。政府は来年にも批准する方針だとされるが、併せて国内法の整備も急いでほしい。

連れ去りに支援なく

昨年八月、チェコ人の父親に連れられて息子が突然、姿を消した岐阜県山県市の山田佳代子さん(四二)の場合は、日本が条約に加盟していれば、救われたと思われるケースだ。

「ママ、いってくるね」。長男ケビン君(五)は夫(三二)と一緒におもちゃを買いに出掛けたはずだった。しかし二人は帰らず、翌日夜に夫から「ドイツのフランクフルトにいる」とだけ電話があった。

山田さんは警察に助けを求めたが「連れ去ったのは父親だから」と対応してくれなかった。看護師の仕事の合間に相談した外務省やチェコの日本領事館からは、日本が条約に加盟していないことを理由に、弁護士を立てての自力解決を勧められた。

夫婦には離婚話はなかったというが、二カ月後、共通の友人から教えてもらった夫の携帯電話にかけると、夫は「帰らないよ」と一言。電話口に出してもらった息子に「助けに行くから。待ってて」と言うと、夫が横で聞いていたのか、すぐに「助けはいらない」とメールが来た。

夫を刺激しないよう、それ以後、長男とはあえて会話をしていない。「一人で帰れない息子が、異国で唯一頼れる父親に言いたいことが言えるのだろうか」。長男を案じる山田さんは現在、国際問題に詳しい弁護士を介して、息子との面会を求めている。夫が応じなければ、チェコで裁判を起こすことも考えているという。

チェコは条約に加盟しており、日本も加盟国だったら、山田さんは、こうした障壁に一人で立ち向かわなくても、チェコに返還の申し立てをすることができた。

申し立てを受けた加盟国は、不法に連れ去られた子どもを元の居住国へ返還する義務を負う。「子の身体・精神に危害が及ぶ危険」があったり、「子ども自身が帰国を望まない」などの例外規定に該当しなければ、任意の返還を促し、応じなければ加盟国の裁判所が判断することになる。異国での裁判となる親には、加盟国が弁護士を紹介するなどの援助をすることも条約は定めている。

共同親権へ改正必要

ただ、日本が今後加盟すると、山田さんのケースには適用されない。それでも山田さんは「同じ思いをする人が一人でも少なくなってほしい。国内で問題に詳しい弁護士を探し、ここまでくるのは大変だった。それでも本当に息子が見つかるのかさえ分からず、希望の光が見えない」と話す。

一方、日本が加盟すると、外国人の夫からの暴力（DV）から逃れて、日本に子連れ帰国した場合でも、子が返還されてしまいかねないとの懸念が出ている。実際、日本人の場合は圧倒的にこのケースが多いといわれる。

しかしハーグ条約に詳しい大谷美紀子弁護士（東京）は「子どもが直接暴力を受けていなくても、目の前で親にDVがあった場合や、母親と引き離すのは子どもの利益にならないと判断して返還を拒否することはできる」と話す。

加盟国は八十二カ国（今年五月末時点）にのぼり、主要八カ国で未加盟は日本とロシアだけ。山田さんら被害者や支援者が加盟を求める活動で約一万六千人の署名を集めたほか、欧米からの強い要求もあって、国は加盟に前向きと伝えられている。

条約は子と別居した親の面会権の保護もうたっている。日本は離婚後は片方の親が親権者になる単独親権制度を取っているが、これを欧米のような共同親権へ変えていくことも必要だろう。

この問題の一番の被害者は、子どもを引き離された親以上に、親の身勝手な判断で連れて行かれた子どもだ。条約への加盟は、子どもの利益にもなるはずだ。

「ニュースを問う」へのご意見は、〒460 8511 中日新聞編集局「ニュースを問う」係へ。電子メールは、genron@chunichi.co.jp

視座

生物多様性を否定する人間

内山 節
立教大学大学院教授 哲学者

人間はきわめて弱い動物として、地球上に誕生したのではないかと私は思っている。

考えてみれば走力は動物のなかでも下位の方だし、木に登る力も猿にははるかに及ばない。もちろん空も飛べないし、泳ぎながら魚を捕るほどの能力があるわけでもない。普通の動物は地面に落ちている物を拾ったり、ときには腐敗しかけているものを食べても平気だけれど、ウイルスにもバクテリアにも弱い人間は、そんなことをすれば命にかかわってしまう。牛は草を食べれば草のすべてを消化しきって必要な栄養素を手に入れることができるが、人間にはそこまでの消化力もない。

もちろん自然界には人間よりももっと弱そうな生き物もいる。たとえばミジンコはたえず魚の餌にされるし、ネズミもそれほど強い動物とはいえない。ところがそういう弱い生き物は強力な繁殖力をもっていて、少々のことでは種の保全に問題は生じない。だが人間は繁殖力の点でも、かなり脆弱な生き物なのである。

こんなふうにみていくと、人間は地球上に誕生したもっとも力のない、貧弱な生き物なのではないかという気さえしてくる。

とすると、その人間はどうやって生き延びようとしたのだろうか。それは多様な関係をつくりだすことによってであった。

そう考えてみると、人間ほど多様な関係をつくりだしている生き物はいない。人間同士の関係も親子、兄弟、友人、知人、親戚、地域や職業上の関係と多様だし、自然との間にも実にさまざまな関係をつくりだして生きる方法を生みだしてきた。

しかも多様な関係をつくりだすためには、道具や文明もつくりださなければならなかった。身体能力が低いから長い棒でももたなければ木の実を落とすこともできないし、何らかの工夫をしなければ魚を捕るのも難しい。食べ物も料理しなければ体をこわすし、人間同士で助け合ったり、共同作業などをしていかないと、安定的な生存を手に入ただろう。

多様な関係や文明を生だとするな人間を誕生人間の本質る。

とするとな危機の時をつくるこ間が、関係しはじめたって孤立ての本質のことが一人確認でき

ところで

世談

名古屋市議会の本会議を初めて傍聴した。前任地・金沢のころからテレビニュースでよく見た、まぁ～るい議場だ。

意外に狭いな、が第一印象。赤紫色のじゅうたんに、つやのある木机が映える。厳かさを感じた。真ん中に速記者が二人。今では珍しい光景だろう。

開会合図の鐘がチン、チン、チン。子どものころ聞いた、豆腐の行商に似た音色。懐かしさを覚えた。議長の言葉遣いが、平易でべてにも変た、市議ただ中

が、何は、市けが目議も自まで答

中日新聞を読んで

後藤 昌弘

は確体場て

済はるたた

はも聞加

厚生労働長についてした。ただ元局長が失い。

えん罪の被告人は悲ていれば保られず、長所に収容さし、保釈がの保釈金をらない。

また、私相当な費用